

女子大学における地理教育

外山 雅代

本論文では、お茶の水女子大学地理学科を取り上げて、女性と地理がどのような接点を持ち得るかを考察しようと試みた。それにあたっては、まず、本学科が女子大学という女子教育機関に存在していることから、女子教育と地理教育、および地理学科という制度の歴史の変遷を追った。次に、そのような制度のもとで教育を受けた本学科の卒業生たちが、そこでの地理をどう評価し、またその後の姿などからどのように地理とかかわっていきけるのか、卒業生へのアンケートを行ない、その結果を参考にして考えていくことにした。

近代教育の始まりは、女子教育が「女子向けの教育」から職業人を育成する教育へと変質を遂げるきっかけをあたえることとなった。しかし、封建的な男女の差別意識を内包したままの、わが国の教育および社会では、女性が職業人となってそれらとのかかわりを持つにあたっては、さまざまな不利益を被ることが多い。

一方近代教育の始まりにともなって誕生した地理教育は、地理が地域や国を取り扱い得るという特性から、戦前においては、国土賛美から国家への愛着や一体感を高めるために大々的に活用されたという経緯があるが、戦後は一般的にはふるわない教科として敬遠されがちな存在になっている。本教室は戦後以来、地理と女性の専門的なつながりを持ち得る場となっているが、地理がストレートにいかせる職業には女性の進出が少なく、卒業生の大半は、地理学とのかかわりは大学を終えるとともに途切れてしまいがちである。

卒業生の大半は、小学校・中学校・高等学校の時代からいろいろな意味で地理に興味を持ち続けてきた人たちであり、本教室で得た、地理のフィールドを重視し、フリーな視点で地域や事物を把握し得る手法を評価している。地理はその手法を用いることによって非常に広い専門分野を持ち得るため、それら各々を網羅しようとする、広く浅くで漠然とした印象だけが残り、結局何を

学んだのかははっきりせず、大学4年間の「知識」だけでおわってしまうことになりかねない。専門としての地理は女性にとって、職業としても生かしていく状態にあるため、専門ということにこだわりすぎず、地理の手法や視点を間接的に利用していく方向が、現状では最も多くの人が長く地理(的なもの)と付き合っていける方法のように思われる。そのためには、各専門分野の地理を学ぶにあたって、そこに必要な知識を学ぶことも大事であるが、そこに生かされている地理の視点や手法などを意識するよう心がけることも大事であると思う。

また女性だけという環境は、一般社会に対して特殊な環境である。そのため、その良いところも良くないところも様々にあるわけだが、学問に対する姿勢や職業人としての教育という意味においては、えてして鍛えられにくい状態にあるということが、良くない点の代表としてあげられる。またそのように鍛えられるつものない雰囲気、ぬるま湯のようであるとか刺激が少ないといった指摘の一因であると思われる。

卒業生へのアンケートでは、社会における女性の状況などをふまえた上で、国立の女子大学の存在意義についてどのように考えるかを質問した。存在の賛否については簡単に数字で表現できるものにはならなかった。回答者の社会認識や大学へ期待や女性観などに大きく左右され、またそれらが複雑に絡み合っていたからである。とはいえ、本校については、女性のための大学であってほしいとする点で多くが共通していたと思う。女性を鍛えない教育は「女子向けの教育」から脱皮しきれていないとも言える。日本において根強く残っている、役割分担を支持する意識とも絡んで、社会で働く女性の環境はまだまだ整備されているとは言いがたく、職業人であり同時に生活者でもある女性にとって、本当に役に立つ教育や制度や、それらを提供する場所が求められていると要約できる。